13 地方における病院・福祉療養施設間のHIV診療連携モデル構築に関する研究

研究分担者：高田　清式（愛媛大学医学部附属病院 総合臨床研修センター・感染症内科）
研究協力者：末盛浩一郎（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）
村上　雄一（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）
井門　敬子（愛媛大学医学部附属病院 薬剤部）
木村　博史（愛媛大学医学部附属病院 薬剤部）
乗松　真大（愛媛大学医学部附属病院 薬剤部）
武田　玲子（愛媛大学医学部附属病院 看護部）
古川　泰弘（愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）
小野　恵子（愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）
若松　　綾（愛媛大学医学部附属病院 医療福祉支援センター）
中尾　　綾（愛媛大学医学部附属病院 感染症内科）

研究要旨

地方における病院と福祉療養施設間のHIV診療の充実および連携について検討する目的で、急性期病院から福祉施設までの連携モデルの形成と組織構築を研究・検討した。今年度はさらに研究の継続として、具体的に療養型病院および福祉施設にて出張講義行いHIV診療や介護の意識改善・啓蒙に実践的に努めた。また、講義の際のアンケート調査等を通じ地方のHIV診療に関する連携の実態を把握し検討した。高齢者施設におけるHIV感染症等に関する研修会の開催および調査にて、81%が施設として受け入れ可能との結果を得た。さらに、出張講義においても回答者の72%がHIV感染を恐れない、86%が受け入れ可能の意見があり、良好な結果を得､昨年に続き今年も実際に自活不能な症例のHIV感染者の福祉連携が円滑に行い得た。また、本研究を通じ地方におけるHIV診療および福祉連携の実態および問題点が詳細に把握できた。

研究目的

高齢化社会を迎えつつある地域において、HIV診療に関する福祉連携のあり方の研究を行い、診療の充実を図ることを目的とした。さらにその急性期病院から福祉施設までの連携を行う際の具体的事項や方策、提案を纏め上げ全国に発信しHIV診療や福祉連携に関して、1つの地方のモデルとしての役割を担うことを目的とした。

研究方法

急性期病院から福祉施設までの連携モデルの形成と組織構築を研究・検討した。具体的には急性期病院の整備、療養病院および福祉施設にて出張研修を通じてHIV診療や介護の意識改善・啓蒙に努めた。また、県内外のアンケート調査等を通じ地方のHIV診療に関する連携の実態を把握し問題点を検討した。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにした。

研究結果

【1】愛媛県の高齢者施設におけるHIV感染症等に関する研修会の開催および実態調査

平成29年2月14日に愛媛県立美術館講堂において、県（健康増進課）の協力のもと県内の高齢者施設から現場の福祉・介護担当者に集まってもらい、HIV感染症等に関する研修会を開催した。その結果、69名の参加者が得られ、HIV感染症を中心に初心者にも判りやすく講演を行った（講演者:高田清式､他）。今回、愛媛県には高齢のHIV感染者が多い実情や今後介護の面で問題になると考えられるHIV関連認知機能障害（HAND）についても昨年同様継続して話題提供をした。参加者からは「HIVについてよく理

解できた」「エイズ患者増加に伴い介護に関しては、必要であり、より具体的に考えるべきと実感した」、「あまり感染に恐れる必要はないし、施設責任者とも十分に話し合いたい」などと比較的前向きな意見があり、HIV の知識啓蒙とともに参加者各自に対して HIV 感染者を支援することの自覚を促すことが実現できた。研修会の終了時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行った。その結果（回答数 64 名：回収率約 93%）、HIV 感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れない（7%）、治療されていれば恐れない（72%）で計 79%が恐れ不要と感じており、研修会による啓蒙の効果もあってか比較的 HIV に関し前向きに捉えてくれていると考えられた。また自施設への受け入れに関しては、積極的に受け入れる (5%)、薬で安定していれば受け入れる（54%）、不安は強いが受け入れる（22%）など温度差はあるものの、計 81%が受け入れ可能との意見であった。

【2】福祉療養施設への出張研修、意見交換

積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を行った。その結果、計 6 病院・施設への出張にて、計 371 名の参加者に当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向して講義が行えた（図 1）。

なお、各出張講義の終了時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行った。主な内容は、① HIV 感染をどう感じたか、②自分の療養型病院・介護施設への入所をどう思うか、などに関してであった。その結果（回答数 294 名：回収率 79%）、① HIV 感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れない 19%、治療されていれば恐れない 53%で計 72%が恐れ不要と感じており、当方の積極的な姿勢と啓蒙の効果もあってか比較的 HIV に関し前向きに捉えてくれていると考えられた（図 2）。

愛媛県の拠点病院と出張研修実績施設

28年度	種別	参加人数	医師	看護師	MSW	PT OT ST	事務	その他
1	医療機関	86	3	40	5	5	8	25
2	医療機関	54	4	29	3		4	14
3	医療機関	75	7	41	1	7	18	11
4	医療機関	36	2	13	5	3	4	9
5	診療所 訪問看護	43		17	18	3	1	4
6	医療機関	77	1	58		1		17

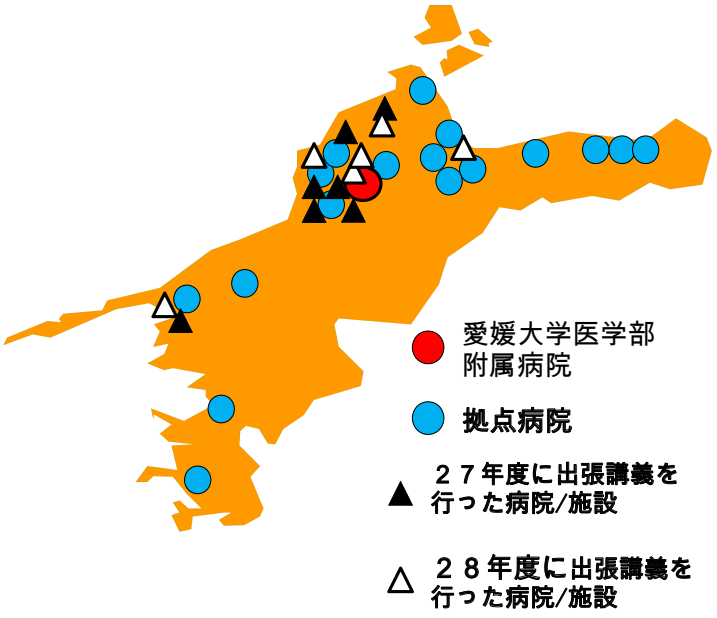

図１地域の病院・福祉施設への出張講義（平成２８年度）

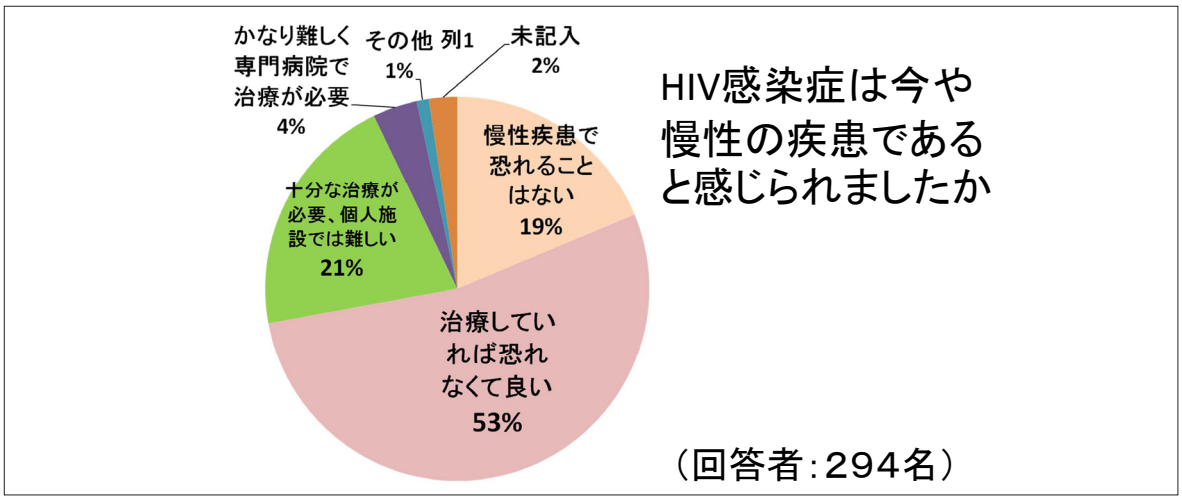

図２　HIV 感染をどう感じたか、恐れ不要と感じたか

さらに、②各自の療養型病院や介護施設への入所・受け入れをどう思うかに関しては、どんな状況でも受け入れる～不安は強いが受け入れるなどのある程度意識の差はあるが、86%が施設として受け入れ可能との意見を得た（図 3）。

なお、今年度もこのような出張講義を、実際の患者受け入れも踏まえて行った結果、昨年度同様に自活不能な 1 名の患者の受け入れが円滑に行えた（累計 4 名）。具体的には、HAND（MND）で認知症が顕著でかつ歩行障害がみられる症例であり、出張講義とともにその後も当院と密に連携しつつ、在宅支援、訪問看護などを行い特に大きな支障もなく療養生活が可能になっている。なお、数ヵ月後の現在、その効果もあり自宅で療養しつつ歩行も可能になり、生活の質の向上がみられている。

【3】在宅介護職員の実施研修

今年度は、今後 HIV 患者の介護に直接あたってもらうことが差し迫った事情であることを踏まえ、計 6 名の在宅介護看護師に各々 1 週間ずつ研修会として、当院の HIV 患者の実施研修と講義・討議を行った。

【4】拠点病院などを対象とした教育講演会、意見交換

HIV 感染者の増加に伴う地域の支援の充実を目的に、保健所職員、拠点病院および多くの立場・職種の有識者（メディア / 学校 / 会社 / 商業などの立場から選出）と HIV 感染予防対策に関する協議会を平成 28 年 10 月 4 日に松山市保健所にて開催し、HIV 感染に関する現況報告（演者：高田清式）を行い、各自の立場での意見交換を行った。さらに、診療レ

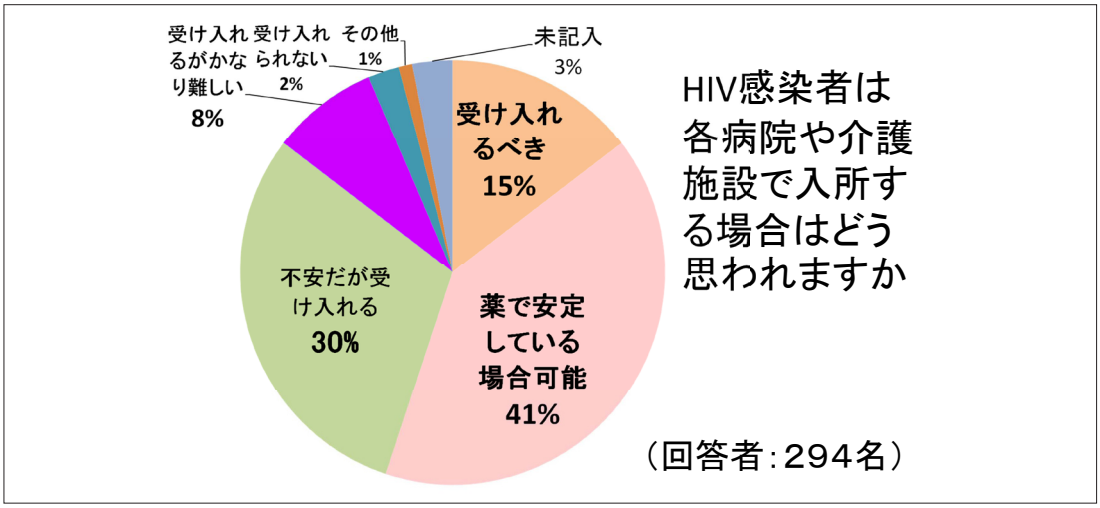

図３　自病院・施設での HIV 患者の受け入れについて

ベルの向上および地域のHIV診療・福祉の現実を多くの医療関係者に知ってもらう目的で、平成29年2月8日に愛媛県のHIV診療ネットワーク会議（県全域の拠点病院が参加）を開催し、県内の他病院のHIV診療状況を検討しあうとともに『愛媛県のHIV感染対策の現況報告』というテーマで、講義・討論を行った。

また、四国地方でのHIV感染症患者の診療連携を目的に平成29年2月4日に徳島大学病院に出向きHIV感染者の高齢化と福祉の連携について報告・相互討議を行った。

【5】地域で実践的なポケット版小冊子の作製

地方でHIV/エイズ患者を積極的に介護施設で分け隔てなく介護をしてもらうための試みとして、介護時のHIV感染予防対策なども折り込んだ、愛媛および四国での実用的な（最新の愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIVに関するポケット冊子（18x10cm大）を作製・改訂し県内および四国の主だったHIV診療施設に配布した。

考 察

地方における病院・福祉療養施設間のHIV診療連携として愛媛県をモデルに、地方におけるHIV診療および福祉連携に関する啓蒙とともに実態調査を昨年度に継続し行った。全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一歩進んでいる愛媛県および四国は、今後のHIV感染者の高齢化と福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

当院では平成28年末現在累計160名以上のHIV診療経験があり（県内の大半のHIV診療を担当）、愛媛県の中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年10名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢のHIV感染者が多く見られHIV診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢のHIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において平成28年末現在50歳以上の8割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、介護福祉の連携は緊喫の課題である。今年度は、具体的に計6施設の療養型病院・介護施設などへ直接出張講義をHIV診療チームとして行った。その結果昨年度計3名に引き続き今年度も1名の介護や福祉環境を要するHIV患者の受け入れが円滑に行い得えたことは、直接に行う出張講義は積極的な連携の1方法として意義が高かったと考える。さらに、出張講義の際のアンケートで計72%は「治療等が良好なら不安はない」（うち19%は治療に関係なく不安はない）および86%が「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高く期待できると考えられた。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良が年々進んでいるものの、今後HIV感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われ今後の1課題と考えている。

いずれにしてもHIV患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加を抑制するためのHIV感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して各地域・病院においてHIV診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。また、今年度も昨年度に引き続き愛媛県の高齢者施設におけるHIV感染症等に関する研修会を全県下に呼びかけて開催しHIV感染者に対する支援者としての自覚を促すことができたことは意義深い。さらに研修会後の実態調査においては、参加者の約4分の3程度は「治療等が良好なら不安はない」（うち7%は治療に関係なく不安はない）および81%で「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高いと考えられた。さらにより具体化した福祉連携をめざし、今年度は地方で実用的な（愛媛や四国の現況や感染予防内服薬を配備している病院名など具体的に刷り入れた）HIVに関するポケット冊子を改訂・配布した。今後現場での意見も聞きつつさらに改良した冊子を将来は作製したい。

また、今年度は徳島県・徳島大学とも福祉連携体制などについて十分討議・連携ができたことは四国地方全体を考える上でも有意義であった。高齢化にあたり、HIV診療および福祉連携のあり方について具体的な今年度の出張研修の結果等を踏まえ、さら

に充実に努め、高齢化率の高い愛媛県のような地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、充足した生活が 1 人では送れない HIV 感染患者に対し、福祉連携が円滑にできるように努めていく必要性があると考える。さらになお、その福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

結 論

HIV 診療および福祉連携に関し積極的に出張講義などを行い個々に具体的な問題を整理し知識・経験を共有でき、施設で患者を受け入れ得た（昨年度から計 4 名）。高齢化社会を迎え介護・療養が必要な HIV 感染・エイズの増加に対応するために、地方での診療・福祉連携の充実は不可欠であり研究を継続しさらに向上に努めたい。

健康危険情報

該当なし

研究発表

1. 論文発表

高田清式：帰国後診療に対応可能な医療機関の現状と問題、日本内科学会誌 105（11）：2160-2166、2016

2. 学会発表

石川朋子、石井幹夫，小野恵子、末盛浩一郎、坂本早輝、滝本麻衣、若松綾、乗松真大、木村博史、井門敬子、高田清式、エイズ診療地域連携を目指した研修会の評価～アンケート調査による研修会有用性の検討～。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会、鹿児島、2016 年 11 月

坂本早輝、若松綾、滝本麻衣、石川朋子、末盛浩一郎、中尾綾、乗松真大、木村博史、小野恵子、岩村弘子、井門敬子、高田清式、末期脳悪性リンパ腫 AIDS 患者をスムーズに在宅療養へと繋げられた事例。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会、鹿児島、2016 年 11 月

中尾綾、坂本早輝、滝本麻衣、石川朋子、小野恵子、若松綾、西村勇介、木村博史、井門敬子、末盛浩一郎、山之内純、安川正貴、高田清式、風景構成法を通した HIV 陽性患者への心理支援。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会、鹿児島、2016 年 11 月

乗松真大、井門敬子、木村博史、若松綾、小島潤美、中尾綾、小野恵子、末盛浩一郎、田中守、田中亮裕、高田清式、愛媛大学医学部附属病院における抗 HIV 薬院外処方開始と今後の展望。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会、鹿児島、2016 年 11 月

岡崎玲子、蜂谷敦子、潟永博之、渡邉大、長島真美、貞升健志、近藤真規子、南留美、吉田繁、小島洋子、森治代、内田和江、椎野禎一郎、加藤真吾、豊嶋崇徳、佐々木悟、伊藤俊広、猪狩英俊、上田敦久、石ヶ坪良明、太田康男、山元泰之、福武勝幸、古賀道子、林田庸総、岡慎一、松田昌和、重見麗、濱野章子、横幕能行、渡邉珠代、田邊嘉也、藤井輝久、高田清式、山本政弘、松下修三、藤田次郎、健山正男、岩谷靖雅、吉村和久、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 30 回日本エイズ学会学術集会・総会、鹿児島、2016 年 11 月

高田清式、HIV 感染症を中心とした性感染症対策～地域におけるエイズ拠点病院の取り組み。日本性感染症学会第 29 回学術大会シンポジウム、岡山、2016 年 12 月

知的財産権の出願・取得状況　（予定を含む）

該当なし